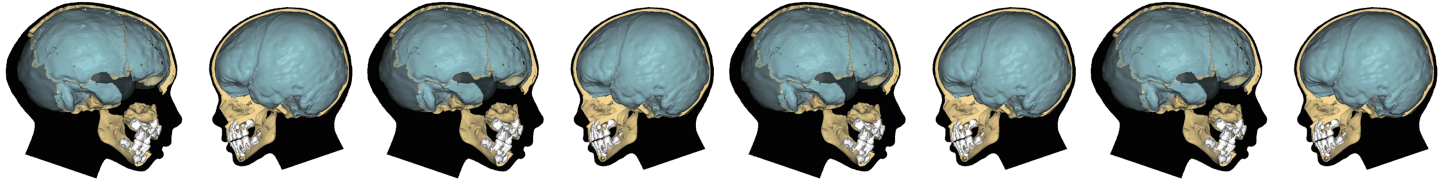


# 公開講演会

## ネアンデルタール・ミッション —日本人研究者による旧人遺跡の調査



日時 2015年  
**11月28日** 土 13:00-17:00  
(開場 12:00)

会場 **東京大学本郷キャンパス  
理学部2号館講堂**

主催 文部科学省科学研究費補助金・平成27年度 新学術領域研究  
「ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：  
学習能力の進化に基づく実証的研究」(2010-2014)

入場無料  
定員200名  
(先着順)

### PROGRAM

13:00-13:10

ごあいさつ  
西秋良宏 (東京大学)

13:10-14:10  
(講演50分+質疑応答10分)

日本人、ネアンデルタール人と出会う  
— イスラエル、アムッド洞窟の発掘  
木村 賛 (東京大学)

日本人がネアンデルタール人骨を初めて発掘したのは1961年のイスラエル、アムッド洞窟です。発見は1964年にも続き、西アジアを代表する人骨コレクションを形成することとなりました。当時の調査を振り返りながら、その意義について考えます。

14:10-15:10  
(講演50分+質疑応答10分)

シリア沙漠にネアンデルタール人を求めて  
— ドゥアラ、ケウエ、デデリエ洞窟  
赤澤 威 (高知工科大学)

アムッド洞窟の発掘以降、1970年代から2000年代にはいっても西アジアにおけるネアンデルタール人探索は続きました。シリア、レバノンでの現地調査の報告をまじえ、交替劇プロジェクトを構想するにいたった経緯について述べます。

15:10-15:30

休憩

15:30-16:30  
(講演50分+質疑応答10分)

東ユーラシアのネアンデルタール人  
— ウズベキスタン現地調査から  
西秋良宏 (東京大学)

長らくネアンデルタール人が分布する東限はウズベキスタンだとされてきましたが、近年、それ以外にも生息していたことがわかってきました。ウズベキスタンの現地調査をふまえ、中央アジア以東のネアンデルタール人研究の課題を展望します。

16:30-17:00

質疑応答

## 公開講演会

# ネアンデルタール・ミッション

## —日本人研究者による旧人遺跡の調査

### 開催趣旨

交替劇プロジェクト(「ネアンデルタールとサピエンス交替劇の真相：学習能力の進化に基づく実証的研究」)では、ヨーロッパで繁栄したネアンデルタール人が絶滅し、アフリカで進化した現生人類にとって代わられた経緯や原因について探ってきました。この問題を議論する観点は多々ありますが、このプロジェクトでは、特に学習能力の差異が交替劇に大きな役割を果たした可能性について分析しました。前回の報告会では、その仮説を検証した結果、たとえば、両集団では脳の形態が違っていたらしいこと、同じ環境に生息していた場合、革新的文化をうみだしたのはホモ・サピエンスであったことなどを報告しました。どれも間接的な証拠ですが、「学習仮説」を支持するものと思います。ユニークな仮説をかかげて挑んだ日本発の研究プロジェクトは大きな貢献をなしたものと考えています。

さて、今後の日本のネアンデルタール人研究はどこへ向かうのでしょうか。近年、遺伝学が議論をリードしているようにも見受けられますが、やはり、この分野の研究の原点はフィールドワーク(野外調査)であろうと思います。そもそも、ネアンデルタール人の骨や彼らが使っていた道具、食べ残した動物骨など、当時の物的証拠そのものなくして研究は始まりません。フィールドワークは研究室で得られるのとは違うデータや論点を生むはずです。

今回の報告会では、さらなる研究の方向を見据え、日本人によるネアンデルタール人研究の過去と現在について考えてみます。そもそも、なぜ日本人がこの研究を始めたのか。今回の交替劇プロジェクトにいたるまで、どんな歩みがあったのか。また、現在、どんなフィールドワークがおこなわれているのか。半世紀を超える研究史を振り返りながら、今後について考えてみます。

### 講師紹介

木村 賛 きむら たすく  
東京大学・名誉教授

赤澤 威 あかさわ たける  
高知工科大学・名誉教授

西秋良宏 にしあき よしひろ  
東京大学・教授

会場●本郷キャンパス  
理学部2号館講堂

〒113-0033 東京都文京区本郷7-3-1

